

---

# 春は出会いと別れの日

神田白兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春は出会いと別れの日

### 【Zコード】

Z2339

### 【作者名】

神田白兎

### 【あらすじ】

「ちわー。メイドいかがっすかー？」

両親と死に別れて、自暴自棄になつてひきこもつていた俺を、悲しみの底から引きずり出したのは、宿なし借金持ちメイド志願の女、春日あずま。

馬鹿で、破天荒で、お人好しで、まっすぐで、気高い彼女と俺の、どつしそうもなく大切な日常。

## メイドはいかがですか？

「柳！　お前ん家のメイドわん、見せて！」

クラスの友達の要求に、思わず頭突きで割らんばかりの勢いをつけて、机に突っ伏した。

新学期早々、こいつは何を言つてるんだ？　春の陽氣で、からうじてかすかにあつた脳みそが、ついに全部溶けたのか？

「……あんた、バカじゃないの？　確かに暮柳の家は、メイドさんがいてもおかしくないくらい、バカでかくて金持ちだけど」

「お前、二次元にはまりすぎ。現実の日本にメイドさんなんている訳ねーだろうが。せいぜい、おばさんのハウスキーパーだつづーの」他のクラスメイトはアホの戯言だと思って、痛い人を見る目、もしくは憐れみの視線をアホにやつて言つ。

俺はとにかく無言。黙秘権を貫いて、事がこれで終わることを祈る「ちょっと… やめろよ… その痛車とかを見るような眼で、俺を見るのやめて！　視線で『……うん。生きる』って語らないで、慰めないで、憐れまないでくれよ！！」

「マジだよ！　マジで、若くて綺麗なメイド服を着たメイドさんが、柳の家にいるらしいんだよー！」

「……お前の妄想を他人ん家に押し付けるな」

何で俺、こいつと友達なんだろう？　多分、これは俺の生涯七不思議の一つになるな。

まだ何かをわめいてるアホは放置しておいて、俺は鞄の中身を机に入れるのを続行する。

……あ、しまった。弁当、忘れてきた。

「なあ、悪いけど昼飯代を貸してくれ。弁当、忘れてきた」

「ん？　財布はどうしたんだよ？　……って、そういうや柳つて何か用がある時以外、学校に財布持つてこないよな。別に全然構わないけど、メイドさん」

アホはぐねっと、乙女ポーズでおねだりした。俺の精神に会心の一撃。

「……だから、そんなもんはいねえって……」

「おーい、暮柳！ 家の……人？ ガ、忘れ物を届けに来ててくれたぞ」

クラスメイトがすさまじく微妙なニコアンスと顔で、喜ぶべき報告をしてくれた時、俺の時は止まった。

きっとそのクラスメイトはスタンド保持者だ。スター白銀さんがいました。きっと多分。むしろ、いつそいてくれ。

「お、良かった……な……」

アホは正真正銘のアホみたいに、口をあんぐり開けた。

そしてこいつを、憐れみや痛い人を見る目で見ていた連中も、まったく同じ反応をして、俺の弁当を持ってきた『家の人』を見る。喪服のような真っ黒で丈の長いワンピースに、清潔な白いエプロン。トドメと言わんばかりに、黒いショートヘアの上には白いベッドドレスが乗つかっている。

完全無欠にメイド。

言い訳不可能なくらいメイド。

「坊ちゃん！」

出張メイド喫茶みたいな女は、俺の弁当を持って、俺の方を見て、俺に手を振つて言う。

「本当、低血圧つすよねー。朝は全然、脳に血液が巡つてないっつーか、ボケ倒しと言つか。

せっかく、今日の弁当は坊ちゃんの好物のだし巻き玉子とからあげが……？ 春日坊ちゃん？ どうかしました？ 何で無言で、震えてるんすか？」

本気で空気が読めていないのか、わざと壇つてゐるのかは知らんが、とりあえず俺は、キレることにした。

「……あずまあー！ その格好で出歩くなつて何千回言わす氣だ、てめえ！ あと、その呼び方もやめんかああつ？」

俺の名は、春日。<sup>かすが</sup>姓は、暮柳。<sup>くれやなぎ</sup>

歳は、早生まれなので十七歳。<sup>じゅうしちさい。</sup>高校一年生。<sup>こうこう いっしんせい。</sup>家は、自慢に聞こえると思うが、頭に大をつけていいレベルの金持ち。

両親は去年のちょうど今頃、交通事故で亡くし、独りになつた。……けど、本当に一人つきりの期間は、たったの一週間だけだつたりする。

『ちわー。メイドいかがつすかー?』

ふさきこんで鬱まつしげらに自閉していた俺を、石化させた人物。<sup>ふさきこんでうつまつしげらにじひしていたあんを、せきかさせたじんぶつ。</sup>

春日あずま。

そいつは、そう名乗つた。

『どつちが姓だか名前だか、わかんないすよねー』と、ノーランジに笑いながら。

人の家にいきなりセールスマンかのよつにやつてきて、意味のわからん事を言い出して馴れ馴れしく話す、やや年上の女にとりあえず俺は、石化が解けた後に言つた。

『帰れ』

『家ない。現在所持金、一十七円!』

五枚の硬貨を見せて、なぜかそいつは妙に誇らしげだつた。

『昨日、ついに借金のかたで家を売つぱらつちやつてね。本当は五百一十七円あつたんだけど、銭湯とコインランドリーで、あつという間に一ヶタ! 野宿は平気だけどこれでも一応女だから、体と服は綺麗にしひきたくつてね』

野宿したら結局汚れて意味がねーし、第一危ないだろ……という常識的なつっこみも出てこなかつた。

何、こいつ? マジ話? ふざけてるのか? 俺はからかわれてるのか? 頭がおかしい人? やばい人?

とにかく、俺はあまりこれ以上関わりたくないなかつた。

だから財布丸ごと、そいつに渡した。

『……これやるから、出て行け』

中身は確か三万くらい入っていたから、そいつの話が本当だとしても、安いホテルになら一・二日くらい過ごせるはず。

とりあえずこれで追っ払えると、俺は思いこんだ。

顔面に思いつきり、財布を投げ返されるまで。

『ふざけたことしてんじゃねえよ！ 自分で金を稼いだこともねえ糞ガキの分際で！ 親がくれたものを、軽々しく他人にやるな？』  
いきなり他人に家にやってきて、非常識この上ないことを言い出した奴に、説教された。

『金はな、自分で稼がなくつちゃもらえないものなんだよ！ ただ欲しいだけなら初めからそういうわ！ 私は、金がただ単に欲しいんじゃなくって、雇つて欲しいんだよ？』

無茶苦茶な奴のくせに、正論を言うし。

もはやこいつがおかしいのか、実が俺の方がおかしいのか、この時すでにわからなくなっていた。

わかつた事は、二つだけ。

春日あずまつて奴は、確実にアホで変人だけど、悪い奴ではない事。

それから……

『親がくれたものを、軽々しく他人にやるな？』  
その言葉は、とても正しいという事。

「……春日坊ちゃん。まだ、学校にメイド服で弁当を届けた」と、怒ってるんすか？」

「当たり前だろ？ あの後、メイドフェチだとか何とか、どんだけ言われたと思てるんだ！ お前が『メイド』と言つたら、これつしょー！」とか言つて、勝手に着てるだけだつて言つても誰も信じねーし！」

「それは失礼っすね。坊ちゃんはメイドフェチじゃなくて、セーラー服フェチなんすから！」

お宝だって、女子校生ものオンリーですし」

「どこのをフォローしてるんだよ！ つーか、何で知つてる…？」

死にたい！ 今すぐこの家を爆発させて、全てを木つ端みじんにして死にたい！

もしくはこの場で穴掘つて、その中に埋まつたい！ ジジコビングだけけど…

頭抱えてうなだれる俺の肩に、あずまはポンッと手を置いて言つた。

「坊ちゃん。私はメイドっすよ？ 洗濯機の脇つて隠し場所はなかなか斬新でしたけど、そりやばれますよ。素直に自分の机の中が、一番の安全地帯っすよ」

「うるせー…！」

「とりあえずお宝は、坊ちゃんの箪笥の上から一段田の奥底に移しておきました。そっちの方が発見しにくいから」

「余計な気遣いをするなー！」

雇い主を本気で怒りせとおきながら、あずまはへらへらと面白がりうに笑つていやがる。

「いやー、すみません。でも、話を戻して言つてみますと、この格好で出歩くなと言われましても私、これ以外の服は持つてませんし」

ピラリと裾を持ち上げて、またこいつはふざけた性格のくせにそれなりに筋道が通った事を言い出しあがる。

そうだ。こいつの服は、同じデザイントライ五着を着まわしてゐるんだつた。

「買えばいいだけだろ、買えば！ 私服の一着や二着くらい持て！」

俺はつい、言つてしまつ。答えなんて、わかりきつてゐる事を。

「金ないから無理。給料全部、返済に充ててるし」

あずまはいつものように、ケロリとノーハンタスに言つた。

同情なんて求めていない、誰にもさせないくらい、あつさつと。

こいつが出会つて初めに言つたことは、すべて事実だつた。

借金返済の為に家を売つて帰る場所がなかつたのも、所持金どころか全財産が一十七円だつたことも。

あずまも、両親を事故で亡くしたらしい。

俺と違つところは、あずまに残された遺産は数十万の金と、あまり価値があるとは言えない家と土地。そして、一千万弱の借金。

あずまの家は小さな下請けの工場をやつていたらしく、ここ最近の不景氣で抱えた借金らしい。

返せる充てがあつたからか、娘に心配をかけたくないなかつたからか、あずまの両親はあずまに借金のことを何も話してなかつたらしく、当時、卒業間際の高校3年のはずまは途方に暮れたそうだ。

ただでさえ突然両親が亡くなつたら、悲しいとか感情面だけでも大変なのに、あずまは両親以外に親戚がおらず、天涯孤独。

葬式に、財産、工場のこと……、十八歳のあずま一人で出来ることなんて、たかが知れてる。

唯一の幸いは当時の担任は面倒見が良くて、弁護士やら何やらを紹介したり、財産関係を整理してくれたり、少なくとも卒業はできるように奔走してくれたらしい。

担任が苦労してくれたおかげで、あずまは無事卒業できたが、両

親が死ぬ前までは大学進学予定だったのでもぐくな就活ができず、就職が決まらないまま卒業してしまった。

そして、あずまは相続放棄できた借金を放棄しなかった。

『私を育てて、大学まで行かせてくれようとして親がした借金ですから、私が人生掛けて返すべきでしょう?』

何故、相続放棄しなかったを訪ねた時、あいつが言った言葉。

そう言い切ったあずまは、文句なしに格好良かつた。

いや、こいつはいろんな意味でやたらといつても格好良い。

卒業して、もう頼れる担任はないのに家をいきなり売ったのも、借金の取り立てでフーゾクかエンコーでもして稼げと言われたのに、腹が立つたかららしい。

古くて小さくてそこしか帰る場所はないのに、両親との思い出が詰まった家なのに、どうしたら少しでも高く吊り上げることができることなんてわからなかつたけど、とりあえずそれで、半分近くの借金が返せるから。

正攻法で返済して見せる姿勢を見せて田玉をひんむかせてやつた、とあずまは胸を張つて語つた。

あまりにも後先を考えていらない大バカだけど、本当にこいつは正しくて、惚れてしまいそうなくらい、格好良い。

惚れるつて言つても恋愛感情じゃなくて、何つーか……「兄貴と呼ばせてください!!」的な意味で。……姉御ですらねーのかよ。

こいつは何で、見た目は清楚なお嬢系美人なのに、中身はこんなにもどうじょうもなく体育会系なんだ?

「……じゃあせめて、ヘッドラレスとエプロンを外出する時は外して行け。そうすればただの黒いワンピースだ」

俺がため息をついてそう言つと、切れるところは全て切つている

借金持ち体育会系メイドは、俺よりも盛大なため息をついた。

「坊ちゃん。そこは『俺が一着くらい買ってやる』って言うところ

でしょう?「

ちつちつと指を振つてあずまは指南するが、何故そんなラブコメ展開なセリフを俺が吐かなくちゃいけねーんだよ?

「もう黙れ! つーか仕事しやがれ!」

「ざあ〜んねん! 掃除・洗濯・買い物・夕飯の下ごしらえは、とつくる紀元前に済ませました! だから坊ちゃんで遊びます!」

「俺『』だろ! 俺『』で『遊ぶんかい!』?

しかし、雇い主を友達か何かかと思っているような態度以外、本当にメイドとして完璧な奴だな。

あずまは思つて以上に変な奴だけど、思つていたほどバカではなかつた。

借金返済のための仕事に何で住み込みのメイドなんていつ、ギヤルゲーみたいなことをやらかそうとしたのかも、根本の発想がおかしそうるが、筋は通つてたりする。

家事が得意だからつていうのも、もちろん理由の大きな一つだが、あすまにとつて「住み込み」というのが最重要条件だつた。

家がない、金がない、借金があるあずまは、住み込みの仕事なら、家賃どころか光熱費なども浮くし、食費だつて必要ないと思つたらしい。

つまり、本来なら切れない生活費さえも全部切り落とし、給料を丸ごと全部返済に充てるという、究極的にバカげていて、一周回つてもしろ天才なんじゃね? なことを考えて、しかも実行しやがつた。

「ネも紹介もなく、高級住宅街の家を一軒一軒、あずまは回つて、あの頭の中身を疑うようなセリフを吐いたんだ。

『ちわー。メイドいかがっすかー?』

何度、門前払いをくらつても、何かやばい変質者と思われても、蔑みの眼で見られても、家を売つて、背水の陣であるあずまは、諦めずに、同じノリで、あのアホなセリフを言い続けたんだろう。

そう思つと、俺自身はどれだけ、恵まれた立場かがわかる。

そして、自分がこの世で一番不幸だと思いこんで、引き籠つてたあの頃が恥ずかしい。

あずまと比べたら、俺が悲劇の主人公なんて片腹痛い。俺はただ、自分の立場に酔つていただけの痛いガキだ。

……けれどあずまは、俺を責めたり、羨ましがつたりしない。

説教は一度だけ。まだ、雇う前。とりあえず追つ払おうとして、財布ごと金を渡した、あの時だけだ。

……あの説教で悪い奴ではないことがわかつて、少しだけ興味を持った。

だから、家に入れて事情を聞いた。

境遇に同情して、様子見にと一二・三日、仕事をさせてみた。

そしたら完璧だったから、本格的に雇うこととした。

あずまを雇つた理由なんて、これくらいのつもりだつた。

でも、本当は家事が上手いとかは関係なかつたのかも知れない。

俺はあずまのうつとおしいと思つことすらすつ飛ばす、ノーカンで、馴れ馴れしくて、格好良いところに、ただ単純に、憧れただけなのかも知れない。

悲劇ぶるにも値しない、小さくて格好悪い俺だけど、……この家に独りきりでいるのは、……淋しいのがただ、嫌だつたからなのかも知れない。

「どーしたんすか？ 急にブルーになつてませんか？」

あずまは死にかけの病人を見るような、お前の方が死ぬんじゃね？ とでも言いたくなるぐらい心 配そうな顔をして俺の顔を覗き込む。

普段はマジ、雇い主つて何？ なノリと態度なのに、他人なんか、気にかけていられない境遇のくせに……、この超絶お人好しは反則だろ？

例えば、俺が風邪を引いてる時。

例えば、両親の誕生日や命日で、俺が落ち込んでる時……

そんなときにそんな顔されたら、泣いてしまいそうだろう？

俺よりもずっとひどい境遇のお前に心配かけて、何もできない俺自身に対する悔しさと……、心配してくれる人がいる嬉しさで……

「何でもねえよ。それより、小腹がすいた。なんかねえ？」

「昨日作ったクッキーが確かまだ残つてたはずですよ」

俺がいつもの調子で言つと、あずまはホツとしたように笑つて、スカートを翻し、クッキーを取りに行つた。

ふわりと優雅になんかじやなくつて、ブワッと派手にパンツが見えそくなぐらい、急ぐ必要もないのに、どたどたと騒がしく。

……体育会系と言うか、あれはガサツなだけだな。メイド服が似合つてるだけに、何か妙にもの悲しいものを感じる。

## 麗らかな終わり

紅茶のポットを高々と右手で掲げて、腹くらいの位置に持つたティーカップに、あずまは茶を入れた。誰も曲芸をしろとは言ってねえよ。

「……あずま、お前妙にテンション高くね？」

「はい？ 私、テンション低かった時なんて、ありました？」

ない。こいつは寝ても寝言のテンションが高い。

三日前、ソファードで居眠りしてた時の夢、一体どんな内容だったんだ？ ジャガイモが進化して、嫌気性細菌になつて、ジョセフィーヌ子爵にプロポーズとか叫んでたんだが……

「何か今日はいつもに増してノリノリというか、無駄に騒がしいといふか、……とにかくいつもよりうつとおしい」

見ていて飽きないのはいいんだが、確実に色んなとばっちりを俺は食らうからな。せめて何か被害をくらつ前に、理由くらい知つておきたい。

「あれ？ そーですか？ まあ、明日のことを考えたら、テンションだつてそりやあ上がりますよ？」

「明日？ 明日って……？」

ああ、そうか。明日はこいつの……

「給料日つすよー！ 私の！ 坊ちゃん、忘れないで下さいよー！」

なんたつて、明日の給料で私の借金は、晴れて全額返済～？

万歳三唱しながら飛び上がって大喜びするあずまが、俺には気にならなかつた。

いや、気にする余裕もなかつた……

初めからわかりきつてることだが、俺とあずまは知り合いでも血縁者でもなく、ただの雇い主と従業員だ。それ以上もそれ以下も、それ以外もない。

ただ、それしかいない。

あずまの借金が減らうが無くなれば、別に喜ぶことじゃない。  
ましてや、ちょっと嫌だと思つことなんて、人として論外なの。  
……

あずまが住み込みでメイドといつ、ギャルゲーそのもののような  
ことをしているのは、給料全部を返済に充てるためであつて、別に  
好きでやつてる訳じゃないんだ。

ひとつ、こんな生活は嫌だつ。 わざと借金返済して、自由にな  
りたいはずだ。

あずまは確か今年で二十歳だ。 本来なら学生にじり社会人にじり、  
最後の青春を謳歌しているはずで、決して家事に追われていいく歲じ  
やない。

……ひとつあずまは借金を全部返済したら、同じを辞め  
る。

給料はそれなりに良いつもりだけど、自由になる時間はほとんど  
ない、大変なだけで張り合ひのない、家事なんて、メイドなんて仕  
事よりもずっと楽で樂しい仕事はあるだつ。

「おめでとう」

自分が出でうと思つてた声とは違ひ、すねてるみたいな冷たい声  
が出た。

すねてるみたいなじやない。

すねてるんだ。恥ずかしくらい、ガキっぽく。

怒つてるんだ。どうしようもなく、理不尽に。

「坊ちゃん、どうしたんすか？ ブルーから戻つたと思えば、今度  
はすねちゃつて」

心底不思議そうな顔をして、仔リストのように首をかしげるあずま  
が無性に腹立つた。

「すねてねえよ… 何ですねなきやならないんだ？」

逆ギレしておいて、すぐに自己嫌悪する俺。

すねてるだろーが。思いつきり。

嫌なんだろー? あずまがいなくなるのが。

淋しいんだろー? あずまがいなくなつてしまつたら。

……この約一年間、良くも悪くもあずまがいて淋しくなかつた。もしかしたら、仕事ばかりだつた両親が生きていたころよりもずっと

あずまは、うるやくて、騒がしくつて、うつとおしゃくて、明るくて、面白くつて、優しくて、いい奴だから。

「はいはい。坊ちゃん、苛々は体に悪いっすよー。カルシウムたっぷりのロイヤルミルクティーでも飲みますか?」

ほら、今だつて俺の逆ギレに、怒りもしなければ謝りもしない。気にした様子もなく、けらけら笑うのはマジで男前。

「……あずま。坊ちゃんはやめろつて、何回も言つてるだろ」自分の器の小ささとガキっぽさが嫌で、恥ずかしくつて、目を合わせずに俺は話を変える。

「前々から思つてましたけど、何で坊ちゃんは、坊ちゃんつて呼ばれるのがそんなにも嫌なんすか? 旦那様も嫌がつたし、『ご主人様つて言つたらマジギレしたじやないっすか』

「当たり前だ!」ここはメイド喫茶か!? 普通に春日かすがつて呼べばいいだろうが!」

「さすがにそんな。友達みたいな呼び方できませんよ」

あずまは、きつぱりと言つた。

どんなにあずまは馴れ馴れしくとも、どんなに俺達は親しくても、結局はやつぱり「坊ちゃん」と「メイド」なんだ……

わかつてる。

わかつてるよ、あずま。

でも、嫌なんだ。

別に恋人になりたいとか、そういう訳ではないんだ。

ただ、金とか契約とかそういう冷たい繋がりだけじゃなくつて、小指の先くらいでいいから、他の繋がりが欲しいんだ。

……お前が辞めてしまった後、ほんの時々でも連絡が取れる繋がりが欲しいんだ。

そつ言いたいのに、口から出るのは可愛げのない糞ガキの言葉。

「…………坊ちゃんなんて、格好悪いだらう」

恰好悪いのは、素直になれない俺自身だろうが。

大バ力野郎。

その夜、  
かすが 夢を見た。

『へえ、春田ってこうんすか』

雑な敬語（？）で、気持ちよくカラッとした笑って話すあずま。

自口紹介をした時だ

宇が一緒にすね私は姓の方ですけど春生まれたからですか？」

ただそれだけのことを、とても嬉しそうに、おかしそうに笑って

た。

だから俺も、つられて笑った。

『もし俺がお前に婿入りしたら、すげーややこしいな』

くだらない冗談に、あずまは腹を抱えて笑つた。

『春日春日！』うわっ、最っ高じゃないつすか！ 結婚しちゃいま

二九一

するかボケ!』

こんなハガなせり取りを一年前麗ひかな白にした

俺達は、出合の季節に出会ったんだ。

即答で振られたや！ けど、就職まで振らないでください

「ねえ、東京タワーよつねートンハマハアホモサハツヒ、手を差し出しだ。

ほんの少し、照れ臭かつた。  
けど俺は、その手を握つた……つもりだつた。

桜が散るよ。あずまの姿が崩れて、影も形もなくなつた。  
そうなることが、初めから決まつていたみたいに。

儂へ、淡泊に、何も残さず。

……今更、嘆くなよ。悲しむなよ。

春は出会いだけじゃなくて、別れの季節だつことを、俺は知つ  
ていたはずだ。

父さんと母さんが死んだのは、あずまと出会い一週間前の…

…、桜がすゞく綺麗な日だったじゃないか。

朝、田覚ましが鳴る前に起きた。

きっと、暑かつたから、寝苦しかつたんだ。  
夢のせいなんかじゃない。

枕が湿つてるのは、汗だ。

涙な訳がない。

……悲しくなんて、ない。

## 別れの季節

その日、学校から帰るのが、いつもより一時間遅れた。

帰りに銀行に寄つて、あずまの給料を引き出そうとしたら、暗証番号がどうしても思い出せなくて、一時間もかかった。

こんなこと、今まで一度もなかつたのに……

「ただいま」

「坊ちゃん、お帰りなさい！」

淑やかさも優雅さもない、スーパーハイテンションな出迎え。やかましくらいに足音を立てて、尻尾があればちぎれんばかりに振つてるくらい嬉しそうにあずまは駆け寄る。

ハッ当たりしたくなるくらい、いつも通り。

何故かその手には今日、俺が家に忘れていた携帯電話を握り締めているのだけが、いつもと違うところ。

「坊ちゃん、昨日は弁当、今日はケータイを忘れるなんて珍しいですね。おまけに帰つてくるのもいつもより遅かつたですし。」「ああ、ちょっとな……」

暗証番号を思い出すのに一時間かかったなんて言えん。言つたらこいつは絶対、人の気持ちも知らないで、腹抱えて笑う。

「おかげで連絡ができませんでしたよ」

「連絡？ 何のだ？」

ケータイを受け取つて俺が尋ねると、あずまの返事より先に声がかかつた。

「春日君。やつと帰つて來たのね。」

いきなり、冷水でもぶつかれた気分になつた。  
厳しくて、何も後ろ暗いことなんてしてないのに、何だか怒られるのではないかと不安になる、そういう相手の声……

「叔母さん……」

相変わらずその人は、何十年前に出てくるテンプレスピルタ女鬼

教師だよ？ つて格好。

スーツも眼鏡もきつちりまとめた髪も似合つといつか、ハマリす  
ぎてるというか……。

背筋も定規でも入つてゐのかと思つくりいビシッと真つ直ぐだか  
ら、大して背は高くないはずなのに、やたらと大きく見える。まあ、  
それは俺の苦手意識のせいもあるのだろうけど。

「まったく。携帯電話も持たずにつままでウロウロしているの?  
話があるから、早く来なさい」

叔母はそう言つて、踵を返してリビングに向かう。

「こゝは俺の家であつて、あんたの家じゃないはずですけど……

「……叔母さん。今日来るつて連絡しました?」

「何？ 何か言つた？ いいから、早く来なさい」

俺が言つことをきかないからか、一時間待たされたからか、眉間に  
しわを寄せて言い放つ。

この人はいつもこうだ。自分が一番正しいと思つて、人の都合を  
考へない。

実際、いつも正しいからこそタチが悪い。

「この人は正しいだけであつて、そこに優しさや気遣いはない。

「……つたく。何しに来たんだか？」

悪いなあずま。なんか、厭味でも言われたか？」

叔母はあずまを嫌つてる。

叔母からしたら、借金を持つてる時点であずまは、後先を考えない無計画な人間であり、軽蔑の対象なんだ。

他にも、あの雑な敬語とか馴れ馴れしい態度とか、挙げていけば  
きりがない。

「いやいや。なんか、私とは話すのも嫌らしくつて、坊ちゃんがい  
つ帰つてくるかつてのを訊かれたのと、コーヒー入れてと言われた  
くらいでですよ」

あずまは俺から、上着と鞄を受け取つて言つ。普通なら、ムカつ  
いてしようがないであろう叔母の態度を、まったく気にせず笑つて

言つ。

叔母にとつてこのへらへらした笑顔が一番、気に障るものなんだ  
うづ。

俺にとつては、尊敬に値するくらい格好良いと思えるものなのに。  
「坊ちゃん。気を使つてくれて、ありがとうございます。けど、こ  
れも仕事のうちだし、何ともないつすよ」

……叔母よりずつと、あずまの方が大人だ。

本当、悔しいけれどここには、めちゃくちゃ格好良い奴だ。

あずまに冷たい飲み物を頼んで、俺はリビングに行く。  
叔母は、苛々と指でテーブルを叩きながら待つていた。  
どんなにこの人が正しくても、俺はこの人に憧れない。むしろ、  
どうしてこんな奴が正しいのだろうと思つ。

「何の用ですか、叔母さん？」

「一週間後から、私もここに住むから

……  
は？

何言つてんの、この人？

言つてることはあずまの第一声より、当たり前だがずつとまとも  
だけど、受けた衝撃は正直言つて同レベル。

「だから、部屋をどこか空けておいて欲しいの。後、あの春田つ  
て子も、解雇しておいて。」

！？

「ちょっと待つてくれよ！ 訳わからんねえ！ 一から説明してくれ  
よ？」

何でいきなりここに住むとか言つてんの？ それに何で、あずま  
を辞めさせなくちゃならないんだよ！？」

いつも俺に相談なしで身勝手に何でも決める人だけ、今日のは  
本気で全然意味がわからない。

それに……、別にわざわざ解雇なんてしなくとも、あずまは……

「今まで仕事で日本にいないことが多かつたけど、これからはあまり飛び回る必要がなくなってきたからよ。前々からもう高校生とはいえ、独り暮らしはあまり賛成してなかつたでしょ？」

叔母は、いつまでも九九を全部言えない子供を見るような、うんざりとした顔で俺を見て続ける。

「春日君はしつかりしてるのはいえまだ子供だし、世間知らずな所があるから、保護者と一緒にいた方がいいわ」

きつぱりとした断定。反論なんて予想してないし、許してない。

「……まあ、それはいいとして……」

全然、いじところなんて俺からしたら何一つしていないが、ここは妥協しておこう。

問題は、その次の要求だ！

「何でそこに、あずまの解雇が入つてくるんだよ？ 海外を飛び回らなくて済むつたつて、叔母さんが忙しいことは変わらないんだろう？ なら、いた方がいいはずだ」

あずまの名を出すと、叔母は不愉快そうに鼻を鳴らした。

「あんな子、別に必要ないでしょ？ もつとちゃんとした清掃会社から、ハウスキーパーを派遣してもらえば済むだけよ」

「理由になつてねえよ？」

勢いで怒鳴りつけると、叔母は鳩が豆鉄砲をくらつたような顔をした。

初めて見たそんな表情に、胸のどこかが結構スッとした。けど、怒りが治まつた訳じゃない。

「あづまを辞めさせた後、どうするかなんて聞いてない！ 結局他の奴を雇つのなら、今まで十分だ！ あずまの仕事は完璧なんだから？」

「……完璧？ 確かに掃除とか料理とかは認めるけど、態度は最低じゃない。雇い主を対等だと勘違いしているは、いちいち動作が騒がしくつてうるさいは、……第一、住み込みっていうのが大問題よ」

「……大問題？ あいつにとつて、大前提だった労働条件が？」

「年頃で赤の他人の男女が一緒に住んで、世間にどう思われるかぐらいわからない？ まったく……、そのうち気付いてくれると思って様子を見ていたのに、丸々一年も雇うなんて……」

「べ、別に俺とあずまは何でもない！ 僕はあずまのこと、女と意識してないし？」

女どころか兄貴だと思っていることはさすがに言わないでおこう。「あなたたち本人なんて、関係ないわ。重要なのは、世間がどう思つていいのかよ」

叔母は言い切った。

これだけは、正しいとは思えない。

正しいなんて、許さない！

「……関係ない。世間や近所に俺達が恋人同士と思われようが、俺がメイドフェチと思われようが別に犯罪じやないんだ！ 僕たち本人が恥ずかしかつたり、困つたりするだけだ！ 問題なんかない！」

それに、叔母さんは知ってるだろ？ あいつには家もなければ頼れる親戚もいないんだ！ やめさせた後にもしものことがあつたら、そつちの方が世間からの評判も悪くなるだろ？

あずまが自分の意思でここを去るのは、仕方ないことだ。

でも、こんな奴の都合で、ただ気にくわないから辞めさせたいってだけのくせして、偉そうに、正しいフリして辞めさせられるのは、

……奪われるのだけは嫌だ？

「知ってるわ。けどもうほとんどないんでしょう？ まとまつた退職金さえ出せば、なんとでもなるわ」

「だからって……」

まだ足搔く俺にキレて、叔母はテーブルを強く叩いて怒鳴りつけた。

「いい加減、わがままはやめなさい？」

一年前、姉さんと義兄さんが死んだのはあなたがあんなわがままを言つたことが原因だつてことを、忘れたのー？」

『『じめんなさい、春日。入学式に行けなくて』

電話で、母さんは謝った。

『来週までには帰るから』

父さんは、約束してくれた。

花見に行こう。

その約束が、永遠に果たされないことが決まったのは、約束を交わした二日後……

## 宣言

「春日君にとひては、ちょっとしたわがままのつもりだったかもしれないけど、こひちこひては大迷惑だったことを少しほわかって欲しいわ。

姉さんと義兄さんは、休みを取る為にどれだけスケジュールを調整したかわかつてゐる？ そのあげく、タクシーが事故に遭うなんて……」

叔母の深い溜め息は、身内を亡くしたこと思い出して悲しいからじやない。

俺に苛ついて、腹を立てているだけだ。

……言いたいことは、山以上にある。

入学式に誰も来でないみじめさを、あんたは知つてゐるのか？ 式が終わつて、一人で帰るのがどれだけ淋しいか、味わつたことがあるのか？

父さんと母さんがどんなに大変な思いをしてくれたかは、少しはわかつてゐるつもりだ。

でも、……たまにはいいじゃないか。たまには、わがままくらい言つたつて。

俺は俺なりに、ずっと独りの寂しさを我慢し続けてきたんだから。けど、言えない。

俺がわがままを言わなければ

花見がしたいなんて、言わなければ

少しでも早く、帰つてきてほしいと思わなければ

父さんと母さんは、少しでも早く帰ろうとはしなかつた。

あの事故が起る日に、その間に、そのタクシーに乗らなかつたのに……

「ただでさえ仕事は日眩がしそうなくらい残つてたのに、葬式やら遺産配分やらで私も過労で死ぬかと思つたわ。

だから春日君。<sup>かすが</sup>「これ以上わがままは……」

「おつとすみません」

ドバッと、叔母の頭上でグラスが真っ逆さまに。

中に入っていたオレンジジュースはもろろん、叔母が頭から被つた。

「！？　？　！　……なつ？」

「あ……、あずま！　何してるんだよー？」

いつからいたのか、あずまはいきなり叔母に思いつきりわざと、勇ましいくらいふてぶてしい態度でジュースをぶっかけた。

「すみません、坊ちゃん。ジュースを台無しにしてしまいました。

今、入れ直します」

あずまはいつもへらへらとした笑いではなく、にっこり完璧な笑顔で軽やかに言った。

完璧だからこそ、その笑顔は嘘だとわかる。

「な……何するのよ！　い、いえ、何を考えてるのー？　態度が悪いのは知ってたけど、客にこんなことするなんて……」

「どうらさんにお客様なんすか？」

叔母に振り返った言つたあずまの眼は、叔母を完全にバカにしきつた眼をしてた。

「お客様っていうのは、こちらが招いて来ていただいた方が、歓迎されている方のことでしょう？　何の連絡もなくいきなり勝手に来た人は、少なくとも私の辞書では、客じゃありませんね」

腰に手をやって、堂々とあずまは言い切る。

反省一切なし。初めの謝罪も、叔母ではなく俺にジュースを台無しにしたことに対するだ。

「か、勝手について、失礼ね！」<sup>かすが</sup>「は……」

「春日坊ちゃんの<sup>かすが</sup>自宅です。あなたのではありません」

叔母に会話の主導権を渡さないあずま。

頼もしい。ものすごく頼もしいが……、怖い！　女の戦いつて、

マジで怖えつ？

がちんこの殴り合にじやなくつて精神を削る揚げ足取りバトルだから、空気の重さが半端じやない！　ここだけ重力が違う！　オレンジジュースをぼたぼたと垂らしての叔母さんの顔が、どんどん怒りで赤くなつていくし……

当事者ですけど、俺、逃げていいいですか？

「あなたは自分が雇われの立場だつてことを、自覚してるの！？

借金を抱える社会的弱者が、偉そうな口利かないで！」「

叔母は、相続放棄できた借金を責任持つて返済している、強いあずまを見下した。

……やばい。本氣で今、殺意がわいた。

「わかつてますよ。私は、坊ちゃんの厚意で生かされてるつてことくらい。

だから…いや、私はあなたを許さない」

熱くなる叔母とは逆に、普段のあずまからは想像もできないくらい静かに冷たく、彼女は言つ。

眼だけは一年前、初めて出会つた時の説教した時と、まったく同じだつたけど。

「許さない？　それはこいつのセリフよ！

訳のわからないことを言つてないで、早くタオルでも持つて来なさい…！」

ジユースまみれの叔母が怒鳴りつけで命令しても、あずまは直立不動のまま。

「何してるの！？　聞こえないの！？　……その態度は何？　解雇されるからつて八つ当たりしてるの？

あなたのその態度が原因でクビになるつてことをわかつてゐ！？　勝手にあずまの性格を作るな。

こいつはハつ当たりなんていうしょうもない」とをするような、格好悪い奴じやない。あんたと一緒にするな。

あなたなんかよりも、あずまはすうじすうじ格好良いんだ。

「……坊ちゃん」

あずまは、叔母のことなんか完全無視して俺に尋ねた。

「タオル、りますか？」

さつきの嘘丸出しの完全無欠な笑顔とは違ひ、へらへらして、力ラッとした、気持ちのいい笑顔で。

「……何で春日君に訊いてるの？……春日さん。あなたは耳と頭、どつちが悪いの？」

「私は雇われの身。借金持ちの社会的弱者ですから」

また激烈に嘘臭い笑顔で、こいつは何故か叔母の言ったことを全面肯定しだした。

「だから、坊ちゃんには頭が上がらないんですよ。それから……、私を雇っているのは坊ちゃんですし、私はあなたから借金をしている訳じゃない。あなたの言つひとをきく義務もなければ、弱みもない」

ひどく冷たい笑みを叔母に投げつけて、あずまは俺に歩み寄る。

「私の雇い主は、春日坊ちゃんお一人。私に何をさせるか、辞めさせるかを判断していただくのは、坊ちゃん。私が命令をきくのは、坊ちゃんだけです」

俺の前に立ち、あずまは慇懃に、優雅に頭を下げた。

叔母の言った、対等だと勘違いしている態度なんかじゃない。雇われどころかこれは、中世の騎士が王にでも捧げるような礼儀と忠誠を持った礼。

「坊ちゃん。勝手な真似をして、ソファー及びじゅうたんを汚し、坊ちゃんのお飲み物を台無しにして、申し訳ありません」  
汚したものの中から、叔母は綺麗さっぱり除外された。

「坊ちゃん。」判断を。

私は、坊ちゃんの為に何をすればよろしいのでしょうか？」

頭は下げたまま目だけを上げて、あずまは悪戯っぽく笑う。

「何、ふざけたことばっかり言つてるのよ！　いい加減にしなさい？」

春日君も少しは諫めなさい！ そんなんだかいの子は調子に乗るのよ？」

いつもならつこ姦縮してしまつ叔母の声が、今は氣にならない。

「……あずま」

「はい。何でしょつか？」

彼女は、ゆっくり頭を上げた。

こいつはどんなに馴れ馴れしくても、自分は雇われた「メイド」だと彼女なりに線引きをしている。

俺達は、「恋人」どころか「友達」ですらないんだ。

「俺の質問に、正直に答える。気遣いなんかするな」

「はい」

それは、金とか契約とかだけの冷たい繋がり。

でも、それでも、こいつは……

「両親が死んだのは、俺のせいか？」

「んな訳ないでしょ」

呆れ丸出しの即答。

あずまは、叔母の言葉と俺が一年間悩み続けた罪悪感を、一秒足らずで否定した。

「……俺は、両親の仕事が忙しいのも、大変なのも知つてたのに、……わがままを言つたのに、……そのせいだ」

「仕事が忙しくて大変なのは、たいていどこも一緒で当たり前のことでですよ。そんなもんに子供がいちいち氣を使つていたら、それこそ何も言えないしできませんつてば」

サラサラと、俺の悩みを「アホか」と言わんばかりに、あずまは答えていく。

……こいつと俺を繋ぐものは、とても冷たいもの。

でも、あずま自身は……

「親相手にわがままなんて、いくらでも言つていいんですよ。そのわがままに答えるかどうかは親次第ですし、あまりに度が過ぎたも

のなら、叱るのが親の仕事ですしね。

親の義務は子供を幸せにしてやることなんですから、そのためには忙しく働いて、家に帰れなくって、そのせいで子供が淋しくて、不<sup>幸</sup>つて本末転倒起こしてゐるんなら……」

くしゃっと、子供をあやすようにあずまば、俺の頭を柔らかく撫でた。

「いつくらでもわがまま、言つていいいんですよ」

叔母とは正反対のことを、きっぱりと言ひ切りやがつた。  
格好良く、優しく、カラッと、暖かく……

冷たい繋がりしかないのに、ただの「メイド」と「坊ちゃん」で  
しかないのに、叔母の言つことをただ大人しく従つておけば楽なの  
に……

なのにあずまば、俺の為に怒つてくれた。

自分のことは仕事だからと笑つて流せるくせに、あずまば俺の為  
に怒り、俺の為に叔母を許さない。

「あずま、叔母さんにタオルを」

俺が眼を伏せて指示を出すと、叔母は不満たらたらな顔で、「や  
つと?」と言ひ。

その顔をまつすぐに見すえ、俺は言ひ。

山以上に言いたかつたことの中から、一番に言いたいこと、言ひ  
べきことを。

「叔母さん。タオルで体を拭いたら帰つてください」

「…………はあ?」

叔母の顔がハトが豆鉄砲ビックリか、グレネートランチャーをくら  
つたような顔になつた。我ながら、意味のわからん表現だな。

「俺は叔母さんとは暮らしません。あずまも辞めさせません。これ  
以上、いくら話しても俺は折れませんから、時間の無駄です。

だから、帰つてください」

「なつ……! 春日君! あなたは誰にビックリしたと/orを言つてるの  
か、わかつてゐの!?

姉さんと義兄さんが死んでから、あなたの面倒をみたのは……」

「あずまです」

「これは絶対に、揺るがないこと。」

「この家の家事をしてくれたのは、あずまです。俺の失敗をフォローリしてくれたのも、あずまです。俺が風邪をひいたとき、付きつきで看てくれたのだつてあずまです。」

春に騒がしく出会い、夏は海や祭りに俺を連れまわし、秋はスポーツやら食欲の秋とうるさく巻き込んで、冬はクリスマスや正月の用意に忙しく、俺の為に働いてくれた。

たつたの一年しか、俺達は過ごしていない。

けど、両親よりもあずまはずつとそばに、ずっと一緒にいてくれた……

「おばさんには、父さん母さんの葬式の用意や財産のこと、会社のことでお世話になつたのは知っていますし感謝もします。でも、俺にといななくて困るのはあずまなんです。一緒にいて欲しいのは、あずまなんです。」

叔母がしてくれた方が、世間的には大変で重要なことだとは思うけど、金がなくても多くを望まなければ何とでもなることを、そのまんま体現しているあずまを見ていると、酷い話だが、感謝はしてもあまり恩は感じない。

両親が死んでから、今まで俺が生きてこれたのは間違いなく、叔母さんではなくあずまのおかげ。

あいつが俺を、決して独りにはさせなかつたから。

淋しいとか悲しいとか思わせる暇なく、毎日が騒がしかつたから。友達じゃないし、冷たい繋がりしかないけれど、そんな冷たい繋がりでも伝わるくらい、あずまはとても、暖かな奴だから……

「だから、叔母さんの指示には従えません。恩知らずなわがままで結構ですし、縁を切つても構いません」

「あずま。お前がいひつて言つたんだから、遠慮なく言わせてもらひますぞ。」

「俺はあずまと一緒に暮らします」

「……何かそれってプロポーズみたっすね」

いつの間にか、あずまはタオルを持ってきて言った。

つていうか、こいつはいつたいいつ出て行って、いつの間に戻つてきたんだ！？

そして確かに、今のセリフは事情を知ってる奴でもプロポーズに

聞こえる？

恥ずい！ 恥ずかしすぎる？

一キロくらい深く穴掘つて、埋まつてしまいたい！ そのまま化

石になりてー！

「坊ちゃん、顔が赤いですよ」

「ふむせーーー！」

一ヤーヤ笑いながら、あずまは叔母にタオルを恭しく渡す。

「どうぞ。体をおふきしたら、玄関までご案内します。『お客様』」

その後、もうしばらく女の戦いが続いたけど、俺は自分が言ったことの恥ずかしさで自己嫌悪のドツボに陥つて、それどころじゃなかつた。

## 春の日向は続く

「……あずま、ほら

「何ですか、それ？」

俺が差し出した封筒を手に取らず、まずは訊いた。

「昨日、あれほど楽しみにした給料だろ？が。いらないのなら、別にいいけどな」

「ああっ？ あります！ めっちゃあります！」

……つーか、今日は渡すの早くないですか？ いつもは夕飯の後に渡すのに

空気バリ重な女の戦いは、叔母が「もう一度と来ない！」とキレて帰った事で何とか終わり、その後すぐに俺は、あずまに給料を渡した。

……渡そうって思った時に渡さないと、たぶん渡せなくなるから。「別にいいだろ」「

もちろん俺にそんなことを素直に言える可愛げなんかない。このセリフさえも、そっぽ向いて言つ。

「それでさつと借金返済して來い。今日で全額なんだろう？」「ええ。今日の給料全部で、ジャスト借金全額完全返済～つて、あれ？……坊ちゃん？」

きょとんと眼を丸くして、ずいぶん可愛らしい顔であずまは訊いた。

「……五万くらい、多いんですけど……」

「ボーナスだ」

せめてもの、別れの手向けに。

あずまは「わがままを言つてもいい」と言つてくれたけど、でもやつぱり、言つていいわがままだめなわがまちはある。特に、あずまは俺の身内じゃなくて他人だし。

……借金がなくなつても、ずっと一緒にいて欲しいとは言えない。

きつと、俺がそう言えればあずまは、ずっといる。」いつは、究極的に人がいいから。

「……プロポーズみたいなことを言つておいて、俺達は別れる。仕方ないだろ？」いくらあずま自身が優しくて、暖かくたつて、俺達の繋がり自体は冷たくて無機質で、拙いものなんだから。

「それで服ぐらい買え。……折角、美人なんだから」

最後なんだ。せめてこれくらいの素直さは見せよ。

直接顔を見れず、窓に映つたあずまにだけ。

「坊ちゃん」

あずまは深く深く、礼をした。

芝居がかつた優雅さはなく、いつもの軽やかさもない。ただ、真撃さがひたすらに伝わってくる。窓ガラスに映つた、鏡像からでも。

「ありがとうございます。」

その言葉に、気が利いた返答は思い浮かばなかつた。

「……坊ちゃんはやめろっつーの」

あずまは、淡く笑つて出て行つた。

借金を返しに。

正真正銘、自由になる為に。

机の上に置かれた、丁寧に畳まれたエプロンとヘッドドレスが妙に淋しい。

「……この家は、こんなにも静かだつたんだ。あずまがない。それだけでこの家は、違和感の塊だ。

本を読んでいたら、あいつがいつの間にか用意してくれる紅茶と茶菓子を探して手が伸びる。

テレビを見ていると、どの番組でもついついあいつの相槌を求めて話しかける。

音楽を聞いていても、どこか何かが足りない。

一人の時、自分が何をしていたのかがわからない。一人でいる事の方が多い暮らしを、ずっとしてきたはずなのに。

この一年の生活が、どうしようもなく染み付いている。

両親が死んだ日を思い出すな。……けど、あの時と違つて悲しみはない。

あずまは、生きているから。

……けど、心にあいた穴の大きさをひとつ、あの時以上だ。

あずまとはもう、接点がないから。

読んでいたつまらない雑誌を放り投げて、何の氣なしの言葉が口から出た。

「俺は、あずまに惚れてたんだな」

異性としてか、人間としてかは、今だにわからない。

けれど俺にとつてあいつは、一番重要な人間にいつのまにかなつていたんだ。

「ありがと。あずま」

俺の為に怒つてくれて。わがままを言つてもいいと言つてくれて。ずっと傍にいてくれて、ありがと。

もう甘えないよ。家事もやる。朝もちゃんと一人で起きるよ。

もう、一年前みたいに自暴自棄にはならない。

……けどせめて、あと一度くらいでいい。道端でばったり出会つて、少し話す。それくらいの繋がりがあることを、願つてみよう。

「ただいま帰りましたー！」

「おう。お帰り」

こんな風に、こつもの調子で帰つてくることまでは、期待しないから……って、ちょっと待てや、兀。

「…？」

あずまはいた。

いつも調子で普通に帰つてきやがったよ、こいつ。

いつもと違うのは、Hプロンとヘッジレスがないことくらい。

「何でお前、帰つてきてんの…？」

「…？」

思わず全力で突っ込む俺に、あずまの方は心底理解できていない、

不思議そうな顔で尋ね返す。

「……は？ だつて私、家ありませんし。……え？ 私、帰ってきてたらダメですか？」

……………アホだ、俺。

そうだ、こいつが住み込みしてるのは、家がないからだろうが。

「……いや、……いい。気にするな。……俺の勘違いだ」

顔が急激に熱くなる。

マジ、アホですよ俺。センチメンタルになるには、少なくともあと一ヶ月くらい後であるべきだ。

「勘違い？ 何を考えてたんすか？」

あずまがエプロンとヘッドドレスをつけ直す。そつかそつか。昨日、俺が言ったとおり外出する時はせめてエプロンとヘッドドレスを取つて、メイド服からただの黒ワンピースになつただけかよ。

「……どうでもいいことだろ」「UN」

「えへ、気になりますって！ 何なんですか？ まさか私がこのまま辞めて、帰つてこなくなるって思いこんでたんですか？」

図星ど真ん中をついてきやがった。

真つ赤になつた俺の顔は、モロ正解と言つていたことだろう。

「あははははははは？ 可愛いーー！ アホだー！ ちよつ、最高！」

「そのボケ、最高過ぎます？」

「うるせー？ 腹抱えながらブレイクダンスみたいに暴れながら笑うなー？」

俺の「うるせー」命令は完全に無視して、あずまは酸欠になるまで笑い続けやがつた。

「あー、おかし！ いくらなんでも借金返済してすぐ、辞めるわけないでしょ！ マイナスからゼロになつただけで、結局は家もない文なしなんすから」

そりゃそーだ。ボーナスとしてやつた五万じゃ一時しのぎへりこにはなるけど、家なしで暮せるわけがない。

……叔母さんが心配する訳だ。俺つて、すっげー世間知らず。

「それに私、辞める気なんてないですよ」

「……え？」

「何すかその顔は？　辞めて欲しかったんすか？　あんなプロポーズにおいて」

「プロポーズじゃねえー！」

俺の反応に胸を豪快にそらせて笑いながら、あずまは続ける。  
「あれ？　違つたんすか？　まあ、それはいいとして、辞める理由  
なんて、私にはないつすよ。住み込みはさすがにそのうちやめるで  
しちゃうが、ここは給料がいいし家事も好きだから、辞めるつもりな  
んて皆無ですよ」

太陽のようなカラッとした笑顔と、まつすぐな言葉。

「……別に、俺に気を使わなくたっていいぞ」

答えはわかつてゐる。あずまは同情なんてしないし、求めない。

「氣は遣いますよ。春日君は雇い主なんですから。……でも、使いた  
くない相手ならどうぐの昔に私は辞めますよ」

「……そうか。……ん？」

今、こいつ俺のこと何て呼んだ？

「あずま。今、俺のこと何て呼んだ？」

「え？　『春日君』ですか？」ですけど、あまりにも坊ちゃんは嫌がります  
し、呼び捨てはさすがにどうかと思ひますし、でも苗字やさん付け  
はなんか変でしちゃう？　じゃあ、残るはこれしかないかなと思いま  
して」

ケロッとした顔でせりつと言つ。

……なんか、坊ちゃんの方がはるかに恥ずかしいはずなのに、こ  
つちの方がむずかゆくなるのは何故だ？

別に変わる」とはない。けど、これからじばりくは変に緊張して  
しまいそうだ。

……たかが、名前で呼ばれるくらいで。

ただ、これからもずっと傍に、ずっと一緒にいる事で。

「あ、そーだ！ 坊ちゃん……じゃなくて、春日君！ 明日、買い物に行きましょう？ 服を見てください！ 服！」

「服？」

オウム返すと、あずまはニヤニヤ笑う。

なんか非常に嫌な予感がする。

「ボーナスの五万で、服を買えって言ったのは春田君ですよ！ なら、春日君が選んでください！」

「げつ！？」

俺の明かに嫌そうな変声を綺麗むりぱり無視して、あずまはそつさと明日の予定を決めて行く。

「楽しみにしてますよ。春日君のセンスを。

それじゃあ、私は晩飯を作りますんで春田君はセンスを磨いといてください」

「拒否権はねーのかよ！ 俺は雇い主だぞ！」

俺の突っ込みに笑いながら、あずまは台所に逃げる。

「…………」

俺は、頭痛のしてきた頭を抱えて、ため息をついた。

それは妙に、心地良い頭痛だったけど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2339j/>

---

春は出会いと別れの日

2010年10月8日12時56分発行